建築デザイン研究室

Architectural Design Lab.

福原 和則

FUKUHARA, Kazunori / Professor

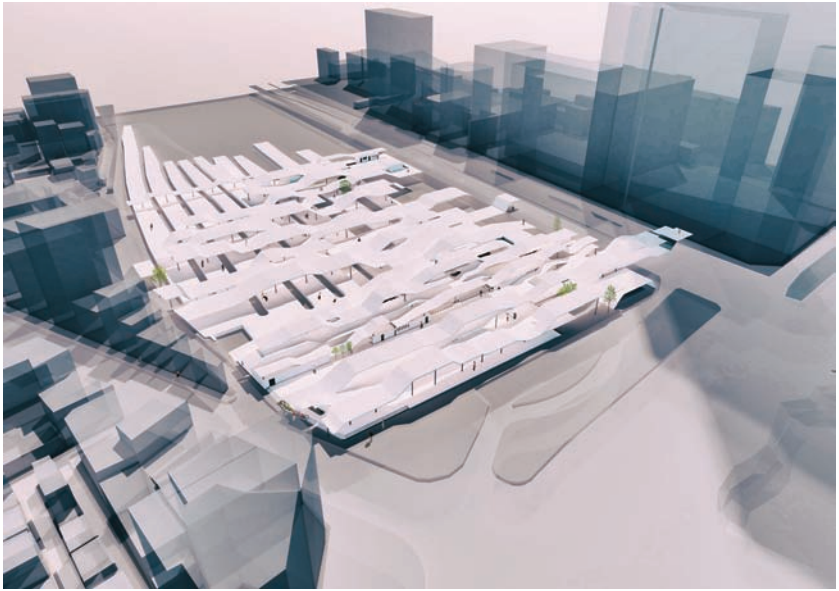
織り成す日常　天王寺における駅の新しい活用の仕方

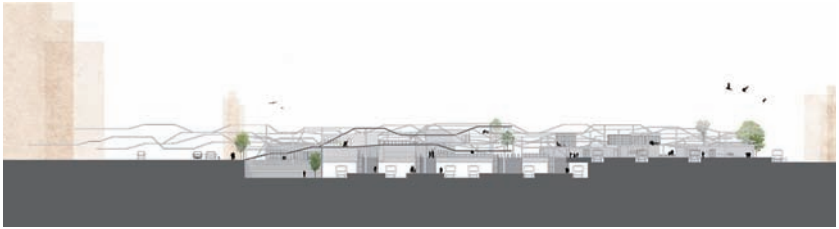
Redevelopment of Tennoji Station: Interactive of Station and City

近年日本の都市開発の中心にあった駅が見直され、画一化が問題視される。高度経済成長期において効率化優先で建設された駅は、多種多様な人々を内包する現代において異質に映る。「社会」を写してきた駅は、新たな時代のニーズをどう写し取り、どう変化するのだろうか。

敷地は近年再開発が進み、歴史的な街並みと下町情緒ある風景が漂白されつつある天王寺。一日平均14万人の人々が利用し様々な人々が行き交う。しかし、大阪第三の繁華街としての開発が期待される天王寺の街と裏腹に、駅は時代の流れに取り残されつつある。

そこに街の中心にある駅を起点とした天王寺の街を写し、紡ぐ場を提案する。





石田 美優
ISHIDA, Miyu

余白的、温泉　里山と対話するコンポジション

Spiritual Hot Spring for Relieving Our Overcrowded Mind: A Composition of Nature and Architecture

人間らしさとは何だろうか。様々な技術が発達し生活が豊かになる一方、競争社会、管理社会の中でデータやそれらと関わり生活しているため人々は常にパソコンと向き合う。現代社会だからこそ人は心の余裕を失ってゆき、ストレスを抱える。

電子デバイスや街の密度が生み出す人工的なストレスから解放される空間、現代のストレス社会に生きる人のために小さな心の余白を作るための温泉施設を設計する。

自然の中に圧倒的な人工物を挿入して豊かな環境に敢えて良い意味でのストレス（刺激）を与えることで、感性や感覚、心や記憶にまで作用することのできる空間の提案。

大角 清華

OSUMI, Kiyoka

染めなす街の学び舎

A School with Dyeing Studio

かつて地域の中心的な存在であった小学校。子供たちを中心に運動会や祭り、バザーなどが行われていた。しかし近年地域コミュニティの希薄化、犯罪に対する備え、少子高齢化などの理由から小学校と地域の距離を遠くした。日本の将来を担う子供たちのための施設を再び街の中心とし地域との距離を縮めるために街の機能を小学校に貫入する。

合わせる機能は地域の歴史や文化を背景とした文化的で創造的なものがふさわしいと考え地域に根付いた伝統産業を合わせる。

計画地はかつて日本の玄関口として栄えた堺市。この堺市を流れる石津川沿いで注染和晒は江戸時代から受け継がれてきた。この注染和晒を小学校と合わせることで、再び小学校を地域の中心とし子供たちの賑わいや活動を街へと溢れ出させる。

大谷 拓輝

OTANI, Hiroki

想像の創造　読者の数だけ広がる世界

Embodying a Fction: Many Worlds Made by Readers

「小説の世界を形にしたい！」

私にとって“本”とは、別の世界へ行くための切符であり“本屋さん”は、数え切れない程の切符が並んでいる少し不思議なお店。

そして本は、誰かの生き方や景色、経験……本来お金で買えないはずのものを手に入れることができる。また、物語とは読者を強く惹き込み、人生に大きな影響を与える程の力を持っている。これらは、心理学的にも幅広く研究されている分野だ。その中で、私は物語を読んで想像する世界、建物などは、読者によってどんな違いがでるのかという点を主軸に追求した。

題材として選んだ小説

———大山淳子先生の『あずかりやさん』

下迫 舞香
SHIMOSAKO, Maika

手紙処　時と想いを紡ぐ場所

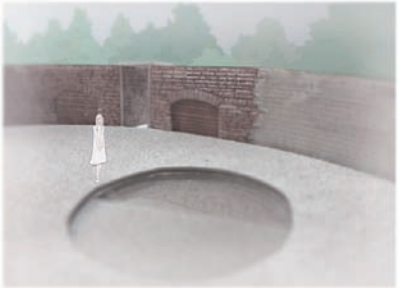
Letter Place: A Place for Spinning Time and Sentiments

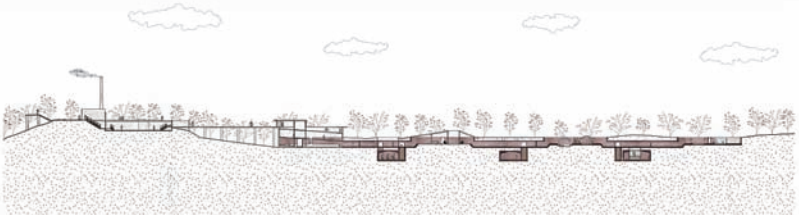
人は人生の節目で自分を振り返り、新たな道を進んでいくのではないでしょうか。

SNS社会で自ら筆をとり“書く”ことから遠ざかっている人々に手紙に触れる機会を持ってもらい、人それぞれの節目で自分の中にある想いを手紙に綴り投函する。手紙を綴ることは、自分を見つめ直し、また考え、想い、手紙を届ける。一通の手紙を出すために、時間をかけ、未来に足を運び、手紙を投函することは私たちの心を豊かにするのではないだろうか。

和歌山県友ヶ島。日常の空間から隔離された遺構が残る友ヶ島は、時を経て海と山に囲まれた自然豊かな癒しの場となっている。使用されることのないまま終戦を迎えた遺構は現在、時間の流れを忘れさせるように昔の姿を残している。時間の積み重ねを強く感じる場で、自分の人生を思い起こさせる場を提案する。

ここにきたあなたの想いは、時を紡ぎいつか届く。





仲谷 友里
NAKATANI, Yuri

風と消える風景　本庄水管橋のさいご

Honjo Water Pipe Bridge: Disappearing with the Wind

明治40年、大阪市北区豊崎。淀川の上で、自分たちの未来の為に橋をつくる人たちがいた。中には2本の水道管が通され、「本庄水管橋」という橋が架かった。柴島浄水場から淀川を越え、大阪市へと水を運ぶ役目が与えられたこの橋は、市民の日常生活を通し、大阪の発展を支える大切な街の一部となった。

遺産として残される建築･土木物は、世界中に存在する。一方で、現役時代の活躍も虚しく、どの様な役割をしていたか知られないまま消えていくものもある。現在、撤去工事が行われている「本庄水管橋」もその1つだ。役目を失い不要物となった橋が撤去される運命を変えられないのなら、撤去されていく過程で、橋の為の建築を考える。

橋に、風などの自然の力をエネルギーに変える機能を持たせ、生まれたエネルギーを自分の為に使う。自分を魅せ、今まで近づいてもらうことが出来なかった人間と出会い、最後には自分自身を解体する。橋の為の建築は橋の終活となり、その姿は、役目は失っても風景の一部として生き、人々の記憶に引っ掛かる。

野田 明日香

NODA, Asuka

色彩豊かなにぎわい空間

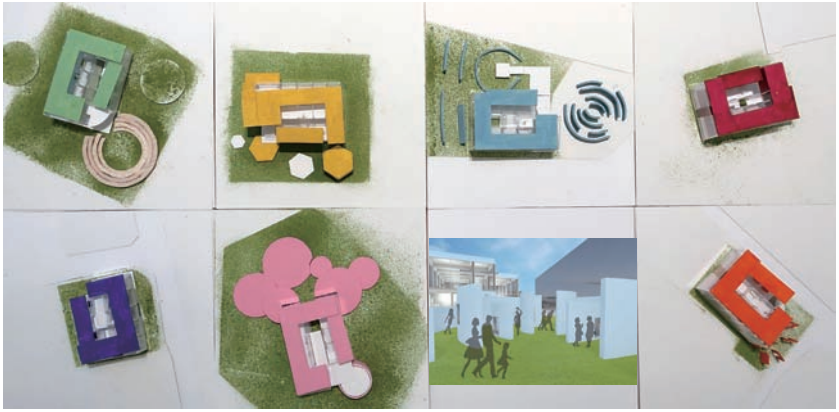
Colorful Crowded Space

原宿では、店舗も多く今も昔も賑やかな街である。十分活気があるが賑わいがメイン通りのみの単純な賑わいであり一歩外れると暗く人通りも少ない。また食べ歩きの店舗が多いにもかかわらず座る場所がないため観光客はその場で飲食しゴミをきちんと捨てる人が少なくなっている。

賑わいの元である色には人の心を動かす力があり原宿には色が沢山使われている。しかし色がメイン通りしか広がりがないため大変勿体ないと感じる。そこで色の魅力を活かしコントロールすることでより良い街となると考えた。竹下通りで主に使われていた7色を使い各色の地にショップ、休憩スペースを設ける。

各色の建物はそれぞれの色がもたらす感情のイメージから作り一つの色でも人によって彩度も違うため様々な人から一つの空間の色が生まれる場となる。

この結果集まる人々の互いの個性を楽しむ場となり問題であった環境や治安も解決することを期待する。そして新たな観光地、情報発信の場となって広がっていく。



戎 彩寧

EBISU, Ayane

和歌浦魚市場　漁業の歴史を伝承する複合施設

Wakaura Fish Market: A Complex for Conveying the History of Fishing

その昔、この和歌浦漁港は雑賀崎や田の浦で獲れた魚の卸売り市場でした。しかし今では、瓦礫が積み上げられた場と大多数を占める駐車場のみとなっています。昭和56年には県下第2位の陸揚量とされたこの場は衰退の一途を辿っています。さらにこれは、高齢化の進行とともに、新規就業者も減少しているためです。

そこで、漁業についての情報発信を行い、生産業である市場を観光施設として捉え、新たな市場を再構築し漁業の歴史を伝承する複合施設の提案をします。

藤原 聡士

FUJIWARA, Satoshi

ココロネのディアローグ　新しいアートセラピーへいざなうインタラクティブアート

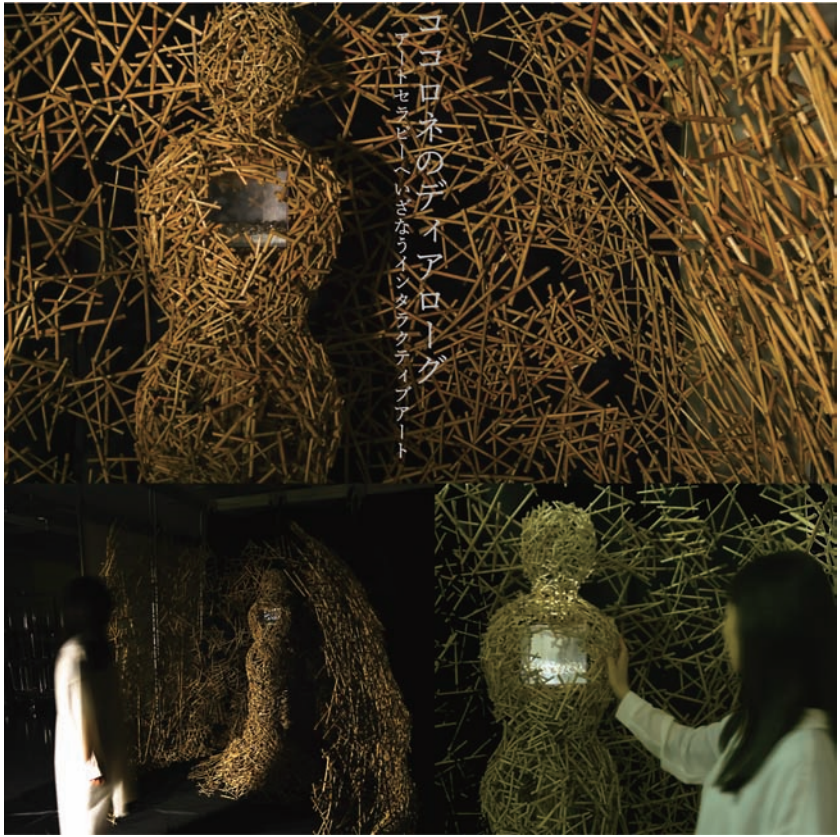
Mental Interaction: Interactive Art Invites to Art Psychotherapy

ストレス社会と呼ばれる近年において、精神面に負担を感じる人が増えてきており、問題になっている。現実的な日々の中で、自分を殺し言葉を飲み込む私達に“自分と向き合う場・向き合う方法”が必要なのではないだろうか。これは心労を癒す作用があるアートセラピーの概念に、インタラクティブ性を加え、誰でも気軽に体験することが出来る、新しいアートセラピーの提案である。「気づき」を得るゲシュタルト療法を元に、以下の様な体験を行う。

ここは、人一人しか入ることが出来ないあなただけの空間、目の前にはあなた自身を抽象化したモノが立っている。気にかけている事について対話をしてみよう。空間から出た後は、中で感じたことについて書き出し自由に自己表現をして客観視してみよう。

この空間は、琵琶湖の水を常に浄化し美しさを保つヨシで形成されている。体験者の心をも浄化する事を願って…。

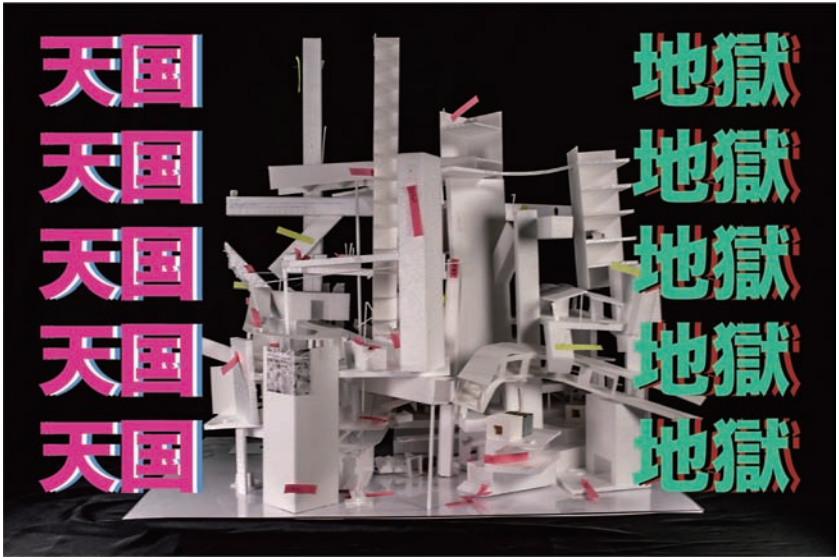
あなたはここで何を思うだろうか。この空間の中では、自分の為に、心の為に向き合ってもいいだろう。自分を見失わないように。



古川 菜帆
FURUKAWA, Naho

Surreal City

Surreal City



私は高層建築を設計した。

アクティビティを閉じ込めた、完全に環境が調整された一般的な高層建築内部は天国か地獄か。都市部の高層のキャンパスに通う私にとって、一般的な高層建築は地獄に感じる。

これは高層地獄を捉え直し、都市に日常を疑う文化、建築と愛し合う文化を作り出す提案である。

本計画はsurrealismの思想に基づいており、日常に革命を起こす。異なるアクティビティがぶつかり合うこの建築では、訪れた人々は新しい世界を見出す。また、彼らは自ら考え建築を使いこなすようになる。

――日常を再考する為のSurreal City。

松原 大地

MATSUBARA, Daichi

公共と高層　～都市を繋ぐ憩いの空間の提案～

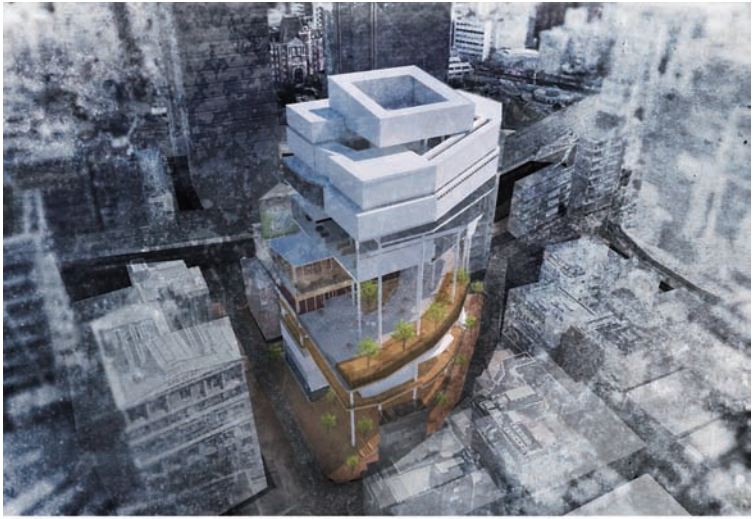
Proposal of a High-Rise Building as Public Space

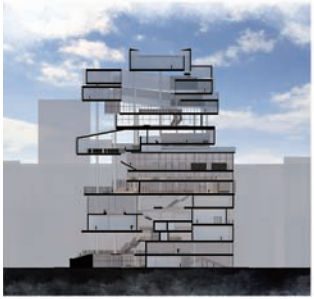
大阪・梅田は全国でも有数の都市である。多くの商業施設や飲食店があり、田舎とは違い非常に便利で、多くの人が行き交う街である。しかしそれ故に誰もが気軽に立ち寄れるような広場や公園、図書館のような場所はあまりない。

そこで、かつて憩いの場であった梅田・茶屋町に図書館と美術館を用いて高層公共複合施設を構想する。

- 立体的な街路を歩き、上昇しながらアート・空間を楽しみ、非日常空間を味わう美術館
- フロアごとに違った雰囲気を持ち、様々な空間でゆったりと過ごせる図書館

この2つの要素を用いて新しい高層建築を提案し、梅田の街をより豊かにする。





御前 和真

MISAKI, Kazuma

自然時間に佇むところ。　千早赤阪村の過疎化に寄り添うランドスケープの提案

Place for Exposing to the Natural Time

幼少期、私は山を登るのが好きだった。幼稚園での遠足や、家族とのお出かけなど山登りの思い出はたくさんあり、千早赤阪村は特によく訪れた。その思い出たちは頂上にたどり着いた時よりも、登っている途中の“道”でおこる出来事ばかりである。

私はこの“道”に寄り添うように、ふと足を止めるようなものが加われば、人々の記憶に残る“場”になるのではないかという可能性を感じた。

千早赤阪村は過疎地域に認定されている。しかし、その過疎をポジティブに捉えると、都会生活で支配された慌ただしい人工時間ではなく、ゆっくりと流れる自然時間を体感する事ができる。過疎だからこそ味わえるこの風景を生かし、普段の自分とは違った考えや感性を創造する『記憶の風景』を提案したい。

山口 あゆみ

YAMAGUCHI, Ayumi